宝鏡三昧

如是の法、仏祖密に附す。
汝今これを得たり、宜しく能く保護すべし。
銀盌に雪を盛り、明月に鷺を蔵す。
類して斉しからず、混ずるときんば処を知る。

如是之法　仏祖密府
汝今得之　宜能保護
銀盌盛雪　明月蔵鷺
類而不斉　混則知処

意言に在ざれば、来機亦おもむく。
動ずれば窠臼をなし、差ば顧佇に落つ。
背触ともに非なり、大火聚の如し。
但文彩に形せば、即ち染汚に属す。

意不在言　来機亦赴
動成窠臼　差落顧佇
背触共非　如大火聚
但形文彩　即属染汚

夜半正明、天暁不露。
物のために則となる、用いて諸苦をぬく。
有為にあらずといえども、是語なきにあらず。
宝鏡にのぞんで、形影相覩るがごとし。

夜半正明　天暁不露
為物作則　用抜諸苦
雖非有為　不是無語
如臨宝鏡　形影相覩

汝これ渠にあらず、かれ正に是なんじ。
世の嬰児の五相完具するが如し。
不去不来、不起不住。
婆婆和和、有句無句。
ついに物を得ず、語いまだ正しからざるがゆえに。

汝是非渠　渠正是汝
如世嬰児　五相完具
不去不来　不起不住
婆婆和和　有句無句
終不得物　語未正故

重離六爻、偏正回互。
畳んで三となり、変じ尽きて五となる。
茎草の味わいのごとく、金剛の杵のごとし。
正中妙挾、敲唱双びあぐ。

重離六爻　偏正回互
畳而成三　変尽為五
如茎艸味　如金剛杵
正中妙挾　敲唱双挙

宗に通じ途に通ず、挾帯挾路。
錯然なるときんば吉なり、犯忤すべからず。
天真にして妙なり、迷悟に属せず。
因縁時節、寂然として照著す。

通宗通途　挾帯挾路
錯然則吉　不可犯忤
天真而妙　不属迷悟
因縁時節　寂然昭著

細には無間に入り、大には方所を絶す。
毫忽の差、律呂に応ぜず。
今頓漸あり、宗趣を立するによって、
宗趣わかる、即ち是れ規矩なり。
宗通じ趣極まるも、真常流注、
外寂に内揺くは、繋げる駒、伏せる鼠、（繋駒伏鼠）。
先聖これを悲しんで、法の檀度となる。
其の顛倒に随って、緇をもって素となす。

細入無間　大絶方所
毫忽之差　不応律呂
今有頓漸　縁立宗趣
宗趣分矣　即是規矩
宗通趣極　真常流注
外寂内揺　繋駒伏鼠
先聖悲之　為法檀度
随其顛倒　以緇為素

顛倒想滅すれば、肯心みずからら許す。
古轍に合わんと要せば、請う前古を観ぜよ。
仏道を成ずるになんなんとして、十劫樹を観ず。
虎の欠たるがごとく、馬の舁の如し（虎の欠の如く馬の舁の如し）。

顛倒想滅　肯心自許
要合古轍　請観前古
仏道垂成　十劫観樹
如虎之欠　如馬之舁

下劣あるをもって、宝几珍御。
驚異あるをもって、狸奴白牯。
羿は巧 力をもって、射て百歩に中つ。
箭鋒あい値う、巧 力なんぞ 預らん。

以有下劣　宝几珍御
以有驚異　狸奴白牯
羿以巧力　射中百歩
箭鋒相値　巧力何預

木人まさに歌い、石女たって舞う。
情 識の到るにあらず、むしろ思慮を容んや。
臣は君に奉し、子は父に順ず。
順ぜざれば孝にあらず、奉せざれば輔にあらず。

木人方歌　石女起舞
非情識到　寧容思慮
臣奉於君　子順於父
不順不孝　不奉非輔

潜行密用は、愚のごとく魯のごとし。
只能く相続するを、主中の主と名づく。

潜行密用　如愚如魯
只能相続　名主中主